様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１２４０１
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３０１０１６

研究課題名（和文）新興国の援助ドナー化プロセスの比較研究：「新興国アイデンティティ」

研究課題名（英文）Comparative Analysis of Donorship in Emerging Countries: 'Identities of Emerging Countries'

研究代表者
近藤　久洋（KONDOH, Hisahiro）

埼玉大学・人文社会科学研究科・教授

研究者番号：２０３８５９５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　7,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は「新興国アイデンティティ」という観点から新興ドナー援助の形成・変容に見られる独自性を理解することを目的としていた。
　研究代表者は、人道主義という規範に対し注目し、南アフリカ共和国の事例を中心に調査・分析を行った。南アフリカが人道主義規範にどのような距離感を持つかについて、援助行政の統合プロセスから分析した論文（査読付き）をとりまとめている。研究分担者は、新興ドナーを中心とする難民支援・難民受け入れについて新たな認識を迫る論考をとりまとめ、『開発援助がつくる社会生活－現場からのプロジェクト診断－改訂版』で難民支援・難民受入の持つ意味を分析し、既存の援助レジームに持つインパクトを論じた。

研究成果の概要（英文）：This project focuses the uniquness of donorship in emerging countries.
 This project produced several papers on the relationship between humanitarian norms and donorship of emerging countries. Particularly, we have research outcomes in journal articles, book chapters, working papers, and conference papers on humanitarianism and humanitarian aid, refugee assistance, aid administration development in emerging countries.

研究分野：国際開発学

キーワード：新興国　国際援助レジーム　規範　アイデンティティ　援助モデル　人道主義　難民支援　難民受入

１．研究開始当初の背景

新たなミレニアムを迎え、G20 のような新興国の台頭が、政治・経済において著しい。しかし、新興国はその台頭において、対外援助をも本格化させており、新興国は自身の対外援助を通じて途上国への影響力を強めてきている。それにも関わらず、国際関係分野においては、依然として外交・安全保障研究や国際経済に重点が置かれ、援助の議論は先進国による援助を想定する。現在の国際関係分野において、新興国の援助は、学問的空白に置かれてきたと言ってもよい。

研究代表者はこうした学術的背景に対して、2007 年から東アジア新興国を対象にした援助研究に着手してきた。その結果、第一に、「新興ドナー」が伝統的な先進国ドナー・コミュニティ（OECD/DAC）の援助関係者、研究者、メディアの間で「異質論」や「脅威論」を喚起していることが分かった。国際社会が援助効果（aid effectiveness）向上のための諸努力を推進しつつあるなか、新興ドナーはこの国際的努力から距離を置き、自国の狭隘な国益に固執する異質なドナーとして出現し、被援助国のグッド・ガバナンス、人権、環境保護、貧困削減を損ねていると批判されてきた（Manning 2006: 1）。他方で、新興ドナーは歓迎されることもあることが分かった。例えば、DAC 諸国の援助に対しては、伝統ドナーがアフリカのインフラ・現地民間セクターのニーズを無視してきたと、モザンビークのシサノ元大統領が批判している一方で、中国援助は、大規模案件、迅速性、借款、民間セクター重視、内政不干渉、といった点で援助受入国に魅力的な比較優位をもつ可能性が高い（Brautigam 2009）。しかし、脅威論・歓迎論のいずれも、本来多様であるはずの新興ドナーを一枚岩のような存在として扱う欠陥を孕んでいた。Kondoh *et al.*（2010）が批判したように、「新興ドナー」なる分類は、韓国のように既に伝統ドナー・コミュニティ入りを果たしている国や中国・インドのような地域大国、あるいはタイのように相対的な小国を包括する極めて大雑把な括りにすぎない。従って、DAC にとっての新興国台頭の意味も当然新興ドナーごとに異なる。

第二に、「援助モデルがどのように多様なのか」という問いだけでなく、「なぜ各ドナーは特定の援助モデルを選好したのか」ということも重要な問いであった。Kondoh *et al.*（2010）の論考では、新興国が多様なドナー化（援助供与国へ移行すること）を見せるのは、各新興国によって異なる要因によることを指摘した。つまり、国内要因として、(1) 支配的な政治的イデオロギー・価値（Lancaster 2007; Noël *et al.* 1995）、(2)　国内アクター（政治家、官僚、援助機関、援助関連企業、NGO、メディア、納税者）とアクター間の相対的なパワー・バランス、国際要因として、(3)　国際政治の文脈及び外交戦略、(4)　国際圧力（DAC 圧力、ライバル国との競争）、(5)　国際経済要因（資源・市場確保のインセンティブ）、といった諸要因の構成と比重が、各国によって異なるのであり、それ故、多様な援助モデルが新興国に出現する。

しかし、Kondoh *et al.*（2010）の研究では、上述の要因を指摘したものの、「なぜ、新興国によって、諸要因の構成と比重が異なるのか」という新たな問いについて、国際社会もしくは地域における新興ドナーのアイデンティティの重要性を強調して研究を結んでいる。構成主義が論じるように、援助という対外政策に関する利益・パワー・行動は、ドナーに内面化された規範・価値のような要因によって構成される。国際関係論で脚光を浴びる構成主義によって新興国を分析することは、新興国がどのようなアイデンティティを持ち、国際社会で何を達成するために、どのような援助を構成するのかについて理解するうえで欠かすことのできないテーマ設定といえる。

２．研究の目的

こうした背景のもと、本研究では、新興国の中でも、とりわけ存在感を高め、比較的大規模な対外援助に関与してきている中国、韓国、台湾、南ア、トルコ、アラブ諸国のドナー化プロセスを扱う。本研究で明らかにするのは、下記の 3 点としていた。

第一に、各国援助の実態と、ドナー化のプロセスを比較し、各援助のパターン（モデル）を明らかにする。その際、具体的には、中国の「大国援助モデル」、韓国・台湾の「中進国援助モデル」、南アフリカの「solidarity モデル」、アラブ諸国の「イスラム・モデル」に分類可能と考えている。

第二に、援助モデルの形成・変容要因を特に各国が持つアイデンティティとの関連から分析を進める。具体的には、中国の「大国アイデンティティ」は既存の援助レジームに潜在的に挑戦し、自らが援助レジームを形成し、援助規範を設定（norm-maker）する可能性を持つのに対し、韓国・台湾の「中進国アイデンティティ」は DAC 等の援助レジームに自身を適合させる（norm-maker）ようになると考えられる。南アフリカのような「アフリカン・アイデンティティ」は DAC 等の援助レジームに従いながらも、アフリカの文脈に即した援助モデルに微調整し、イスラム諸国の「イスラム・アイデンティティ」は、DAC 援助レジームから相当差別化する要因になる。

第三に、新興ドナーの台頭が、DAC 加盟諸国に持つインパクトや、既存の DAC 援助レジームが変容する可能性を明らかにする。とりわけ、大国援助モデルとイスラム・モデルが日本を含めた DAC 援助レジームに持つ影響はそれなりにあるものと考えられる。具体的には、(1)　DAC は「大国援助モデル」・「イスラム・モデル」の「正常化」のために圧力を行使する（非 DAC の DAC 化）、(2)　DAC は非 DAC の新興国と協調関係を構築する（DAC＝非 DAC）、(3)　DAC は自身の援助の比較劣位分野に「大国援助モデル」・「イスラム・モデル」の比較優位を取り入れる（DAC の非 DAC 化）、の 3 つのシナリオが展開するものと予想される。いずれにしても、新興国が援助分野で台頭したことで、国際社会における援助レジームが揺さぶられていることが明確になろう。

３．研究の方法

1 年目においては、第一に、約 4 ヶ月かけて文献レビューを行い、新興国アイデンティティと援助の関係を整理した。とりわけ、新興国にとって異議申し立てが困難と考えられる人道規範に着目し、新興国がどのような距離感を人道規範に置いているかに着目することとした。第二に、新興ドナーのうち、台湾での現地調査を行い、ステークホルダーのアイデンティティ・利益と援助政策との関連を分析し、学会報告・論文公刊にたどり着けている。

2 年目には、新興国援助と規範の関係について比較研究を行い、JICA-RI Working Paper に公表している。この論文では、先行研究分析・現地調査の成果を踏まえた中国・アラブ諸国・韓国の事例を盛り込むことができ、新興国の援助が既存の援助レジームに収斂しているか否か、またその要因を論じることができた。また新興国と人道規範・難民支援との関係を分析した論考を 2 本公刊した。

3 年目には、南アフリカでの現地調査を行った。新興国の一角をなす南アフリカでは、援助行政の構築を巡り、混乱が発生したため、この状況・原因の把握に努めた。本研究プロジェクトは 3 年計画で実施する予定であったが、他の研究プロジェクトと重なることで、現地調査の実施での遅れが発生した。そのため、助成機関の延長措置によって、4 年目の研究を行うことができた。その結果、南アフリカの援助とアラブ諸国・トルコによる難民支

援・難民受入についての論文も公刊することができた。とりわけ、南アフリカの事例から、新興国の援助は、特定規範のみによって説明できるものとは限らず、アイデンティティ・規範を重視する勢力と利益を求める勢力とのせめぎ合いの結果決定されるということを発見できた。

４．研究成果

4 年間の研究助成によって、下記の研究業績のように多くの成果を得ている。

第一に、各国援助の実態を踏まえた援助パターン（モデル）の概念化は、研究代表者（近藤久洋）による口頭報告・論文によって、既に明確化された（2014 年・2015 年・2017 年の口頭報告；2014 年・2015 年の論文。また研究代表者（小林誉明）による 2015 年の口頭報告においても、官民パートナーシップの観点から援助パターンの分類を行うことが出来た。とりわけ、研究代表者の 2015 年論文では、中国の「大国援助モデル」、韓国・台湾の「中進国援助モデル」、南アフリカの「solidarity モデル」、アラブ諸国の「イスラム・モデル」に分類した論考であり、引用件数の多い論文となっている。

第二に、援助モデルの形成・変容要因を特に各国が持つアイデンティティ・規範との関連から分析することができた。研究代表者による論文（2014・2015 年・2015 年・2018 年の論文）、口頭報告（2014 年・2014 年・2014 年度・2015 年・2017 年の口頭報告）に、それら研究成果を反映することができた。中国の「大国アイデンティティ」は既存の援助レジームに潜在的に挑戦し、自らが援助レジームを形成し、独自の援助規範を設定する可能性を持つことが指摘された。対象的に、韓国・台湾の「中進国アイデンティティ」は DAC 等の援助レジームに収斂するような援助モデルを選択していた。南アフリカのような「アフリカン・アイデンティティ」は DAC 等の援助レジームに従いながらも、アフリカの文脈に即した援助モデルに微調整し、イスラム諸国の「イスラム・アイデンティティ」は、DAC 援助レジームとの協調を維持しつつも、独自性を保持していた。加えて、本研究プロジェクトでは、新興国が重視する規範・援助の中でも、特に、人道主義・人道支援の独自性・多様性を発見し、口頭報告（研究代表者による 2014 年・2016 年の口頭報告）、論文（研究代表者による 2017 年論文；研究分担者による 2017 年論文）をスピンオフすることができている。

第三に、新興ドナーの台頭が、DAC 加盟諸国に持つインパクトや、既存の DAC 援助レジームが変容する可能性についても研究を行った。上述の変容シナリオのうち、研究代表者による 2015 年論文は、少なくとも現状では、(2)の「DAC は非 DAC の新興国と協調関係を構築する」局面が展開しつつあることを指摘できている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

本研究では、新興国による援助に留まらず、研究プロジェクトから派生したテーマである多様な人道主義、難民支援・難民受入について幅広く業績を積み重ねることができたと考えている。研究業績の総数は、雑誌論文 8 点、学会報告 10 件、書籍 2 点を数え、特に、英語論文 2 点、ロシア・韓国における英語報告 4 件等、研究成果の国際的な反響を期待できるものになったと理解している。

〔雑誌論文〕（計 8 件）

1. KONDOH Hisahiro, ‘Stagnation of Integration in Aid Administration in South Africa—Choices between Norms, Interests and Power Balance—’, 2018, JICA-RI Working Paper, no. 167, pp. 1–33（査読付き論文）.
2. 小林誉明,「ODA は難民を救えるか:グローバルな人口移動時代における国際貢献

の構図」, 2017 年, 第 97 号, 『東洋文化』, 東京大学東洋文化研究所, pp. 99–116（査読付き論文）.

3. 近藤久洋,「人道主義は普遍的か―新興国と国際人道レジームの未来―」, 2017 年, 第 97 号, 『東洋文化』, 東京大学東洋文化研究所, pp. 47–74（査読付き論文）.
4. Kondoh, Hisahiro, 'Convergence of Aid Models in Emerging Donors? Learning Processes, Norms and Identities, and Recipients', 2015, JICA-RI Working Paper, no. 106, pp. 1–58（査読付き論文）.
5. 近藤久洋, 「比較開発援助論：新興ドナー援助モデルと DAC 化」, 2014 年, 第 50 巻, 第 1 号, 『埼玉大学紀要』, pp. 89–119.
6. 近藤久洋,「特集に寄せて」, 2014 年, 第 23 巻、第 1 号, 『国際開発研究』, 木村宏恒との共著, pp. 1-6（査読付き論文）.
7. 近藤久洋,「開発途上国の市民社会論再考—市民社会の有効性を阻害・促進する条件は何か—」, 2014 年, 第 23 巻, 第 1 号, 『国際開発研究』, pp. 103–16（査読付き論文）.
8. 近藤久洋,「比較新興ドナー援助論：なぜミドル・パワーは援助の DAC 化を目指すのか」,『国際関係学研究』, 2014 年, 第 27 号, 東京国際大学大学院国際関係学研究科, pp. 1–19.

〔学会発表〕（計 10 件）

1. 近藤　久洋, 「規範か利益か―ドナー化プロセスにおけるアクターと規範・利益の選択―」, 2017 年 11 月 26 日, 東京, 国際開発学会 2017 年度全国大会.
2. KONDOH Hisahiro, 'Academic Collaboration in the Field of Development Cooperation', North-East Asia Development Cooperation Forum 2017, 2017 年 9 月 29 日, Moscow (hosted by UNESCAP and RAIDAE)（招待講演）.
3. 近藤　久洋,「暴力のガバナンス」, 2016 年 11 月 26 日, 広島, 国際開発学会 2016 年度全国大会.
4. 近藤　久洋,「新興ドナーの人道主義比較」, 2016 年 6 月 25 日, 京都, 日本比較政治学会 2016 年度研究大会.
5. 近藤　久洋,「新興ドナー援助モデル比較：DAC 援助モデルへの収斂はなぜ多様なのか」, 2015 年 8 月 13 日, 東京, JICA Lunch Time Seminar.
6. 小林　誉明, 「開発援助における官民パートナーシップの多様性―新興国の事例が示す可能性―」, 2015 年 6 月 7 日, 東京, 国際開発学会 2015 年度春季大会.
7. KONDOH, Hisahiro,「Is Good Governance Universal?」, 2014 年 12 月 5 日, KAIDEC Annual Meeting（招待講演）.
8. 近藤久洋, 「新興ドナー援助モデルの DAC 化はなぜ多様なのか」, 2014 年 11 月 29 日, 千葉, 国際開発学会 2014 年度全国大会.
9. KONDOH, Hisahiro,「Why Do Emerging Donors Advocate Humanitarianism in Their Aid? And How Much?」, 2014 年 11 月 26 日, New Delhi, Conference on South-South Humanitarian Assistance（招待講演）.
10. KONDOH, Hisahiro, 「How Do Donor Identities Matter with International Aid Norms for Sustainable Development?」, 2014 年 11 月 1 日, 国連 ESCAP・KAIDEC 主催 North-East Asia Development Co-operation Forum（招待講演）.

〔図書〕（計 2 件）

1. 小林誉明, 「政策改革支援」, 2018 年, 木村宏恒他編『開発政治学を学ぶための 61 冊―開発途上国のガバナンス理解のために―』、明石書店、296 ページ。
2. 青山和佳・受田宏之・小林誉明編, 2018 年, 『開発援助がつくる社会生活－現場からのプロジェクト診断－改訂版』, 東京, 大学教育出版、242 ページ。

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

1. 近藤久洋, 「援助から見る日韓関係」, 2017 年 4 月 28 日, 『埼玉新聞』.

６．研究組織

(1)研究代表者

近藤　久洋（KONDOH, Hisahiro）

埼玉大学・大学院人文社会科学研究科・教授

研究者番号：20385959

(2)研究分担者

小林　誉明（Kobayashi, Takaaki）

横浜国立大学・大学院国際社会科学研究院・准教授

研究者番号：00384165

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者

(　　)